

錢形平次捕物控

棟梁の娘

野村胡堂

青空文庫

一

深川熊井町の廻船問屋板倉屋萬兵衛、土藏の修覆が出来上がったお祝ひ心に、出入りの棟^{とうりやう}梁佐太郎を呼んで、薄寒い後の月^{のち}を眺めながら、大川を見晴らした、二階座敷で吞んでをりました。
酌^{しゃく}は醗酵し過ぎたやうな大年増、萬兵衛の妾^{めかけ}でお常といふ、昔は随分美しくもあつたでせうが、朝寝と美食と、不精と無神経のために、見事に脂肪が蓄積して、身體中のあらゆる關節に笑靨^{えくぼ}の寄るといつた、大變な大年増でした。

「あれまア、月が」

などといひながら、欄干らんかんの方へよち／＼膝行あざつて、品しなを作つて柱に絡からむとそのまゝ、『美人欄に寄るの圖』にならうといった――少なくとも本人はさう信じて疑はない性たちの女だつたのです。

九月十三夜の赤銅色の月が、洲崎十萬坪あたりの起伏の上に、夕靄を破つてぬツと出る風情は、まことに江戸も深川でなければ見られない面白い景色でした。

「成程こいつは良い。深川に生れて深川に育つても、こちとらの長屋の縁側からぢや、お隣りの物干が邪魔をして、こんなお月様は拜めねえ」

棟梁の佐太郎は、主人萬兵衛と一緒に一本あけて、ホロツと來た様子でした。氣性も身體も引緊つた四十男、そのくせお店たなの新

造といはれてゐる萬兵衛の妾のお常の豐滿な魅力には、妙に誘惑を感じてゐるらしく、席を立つて女の背後に行くと、頬と頬とが觸れるやうに欄干に凭もたれて、パンパンと柏手を打つのです。

おとくい先のお妾にちよつかいを出すのと、お月様を拜むのは、全く別な人格と意圖とに出ることで、一緒にやらかしても、一向良心に恥ぢないのが、この時代の市井人しせいのモラルでした。

わけでも佐太郎は、四十過ぎの分別者のくせに、好い男で浮氣者でもあつたのです。

「お月様は明日の晩も出るよ、——さア、親方の好きな熱いのが來たぜ」

萬兵衛は後ろから聲をかけました。西に残る夕映ゆふばえと、東から

昇る月の光をたよりに、まだ灯は點けません、お常と佐太郎の如何はしい態度は、酔つた萬兵衛からもよく見えます。

「へエ、相済みません。折角の十三夜だから、揚幕から出たお月様を褒めてあげなきや」

佐太郎はそんな下らない洒落をいひながら、席に戻つて杯を擧げます。

「私は知つての通り酒が弱いから、とても親方と附き合つちや行けない、——ちよいと横になるから」

二本目の徳利から、一口呑みかけた猪口ちよこを下に置いて、萬兵衛はお常の膝を引き寄せて横になりました。五十を越したばかり、痩せて骨張つてはをりますが、精力的で金儲けが上手で、一代に

江戸でも何番といはれた富を築いただけの強^{した}かさがあります。

その時番頭の忠助は、燭臺を持つて下から昇つて來ました。これは三十五六の柄の大きい、ぽーつとした感じの男ですが、調子にはなかく如^{じよさい}才ないところがあります。

「ちよいとお邪魔いたします」

忠助は縁に吊した三つの提灯に灯を入れて、フト主人の方を振り返りましたが、

「旦那、どうかなさいましたか。ひどくお顔色が悪いやうですが」
物々しく萬兵衛の顔をさし覗くのです。

「先刻から胸が悪くて叶はないよ。酒は親方と一本あけたただけだ
が」

「あつしは何んともありませんがね。何んかお晝に召上がつたものでも悪かつたんぢやありませんか」

「さア、そんな心當りもないが」

主人の萬兵衛は、ひたひ額に脂汗を浮べて、眞つ蒼な顔をしてをります。が、酒好きの佐太郎は、それには構はず、三本目の徳利を一人であけて、四本目が欲しさうな顔をしてをります。

その間にも萬兵衛は胸をかきむしつて苦しみ藻掻き、らんかん欄干に這ひ寄ると、大川尻の水の上へ、したゝか吐きました。ところが、ひどく元氣だつた相手のとうりやう棟梁佐太郎も、その頃から苦しみ始め、これも七轉八倒の末、同じやうに吐いて、半刻ばかりのうちに、棟梁の佐太郎一人だけが死んでしまつたのです。

不思議なことに早く苦しみ出した主人の萬兵衛は、散々吐いた後は落着いた様子で、佐太郎が息を引き取った頃は、起き上がったその容體などを訊ねるくらゐに元氣づいてをりました。

萬兵衛の養子の幸吉は、自分で飛んで行つて、町内の本道石原全龍をつれて來ましたが、その時はもう手遅れで、佐太郎を助ける道はなく、一應萬兵衛の手當をして歸りましたが、

「佐太郎は砒石ひせきの中毒だ。石見銀山鼠捕りいはみかなんか、酒へでも入つてゐたのだらう。これは御檢屍を受けなければなるまい」

さういひ遺のこした不氣味な言葉が、養子の幸吉、番頭の忠助の心持を暗くします。

「全龍先生を追つ驅けるのだ。忠助どん早く、——金で濟むなら

——家から縄付を出したくない」

主人の萬兵衛は、苦しさを忘れて起き上がりました。

二

それから十日、棟梁とうりやう佐太郎の娘お萩といふのが、明神下の錢形平次の家へ、精一杯の心持で飛び込んで來たのです。

二十歳はたちといふにしては、ひどく若く見えるのは、小柄なのと、身扮はでの派手なのと、それに一生懸命さの興奮のせいでせう。

お勝手口へ來て、シクシク泣いてゐるのを、平次の女房のお靜が見つけて、なだめすかして訊くと、父親が殺されたに違ひない

のに、食物の中毒で死んだことにされ、町役人も土地の御用聞も、取上げてくれないので、噂に聞いた錢形の親分にすぎるつもりで、
はる／＼遙々 深川からやつて來たといふのです。

「可哀想ぢやありませんか。表口から入るのを遠慮して、お勝手口で泣いてるやうな内氣な娘なんですもの。會つて話を聞いた上で、力になつてあげて下さい」

女同士の思ひやりから、娘の衣紋えもんを直さしたり、泣き濡れた顔を洗はせたりして、お靜はお萩を夫の前へ押しやるのでした。

「どうしたといふのだ、一應話して見るがいゝ。お前は父親が殺されたと思ひ込んでも、矢張り食中あたりで死んだのかも知れない。

いきなり深川まで出しや張つて、恥を搔くのも變なものだ、――

尤もことと次第では随分力になつてやらないものでもないが――」

平次の態度は、いつもの通り消極的でした。側で聽いてゐるガラツハの八五郎の方は、ゐずまゐ居住を直したり、額を叩いたり、長んがあごい顎を撫で廻したり、話を聽く前からもう、一方ならぬ興奮で
す。

お萩の話はたどくしいものでしたが、根が惻愴な娘らしく、父親の死んだ驚きの中にも、いろくの人の話をかき集めて、どうやらその夜の出来事を彷彿はうふつさせるのでした。

「そいつは氣の毒だが、それだけちや手のつけやうがない、――
醫者はなんといつてゐるんだ」

検屍が済んで、とむら葬ひまで無事に運んだものを、もとに返して調

べることは、御用聞風情の平次にはできないことです。

「でも、町内のお醫者の石原全龍様が、最初石見銀山の毒死に違ひないといひながら、御検屍のときは、お刺身さしみかお酢の物の中毒だらうといったさうで」

「そんな馬鹿なことがあるものか」

八五郎は横合ひから口を挟みました。

「石原様が、板倉屋からお金を貰つて、よい加減なことを申上げたに違ひないと、御近所の衆も申します」

「そいつは幫間たいこ醫者の大おほやぶ敷醫者だらう」

八五郎はまたいきり立ちます。坊主頭に黄八丈あはせの袷ちりめん、黒縮緬しやうかんろの羽織に短かいのを一本きめて、讀めさうもない漢文の傷寒

論^{んふところ}を懷にし、幫間と仲人を渡世にしてゐる醫者は、その頃の江戸には少なくなかつたのです。

「黙つてゐろよ、八、——ところで、人を殺さうとするほどの大それたことは、洒落^{しやれ}や冗談ではできることではない。板倉屋の主人とお前の父親を殺して、得をする者の心當りはないのか」

平次は靜かに訊ねました。

「——」

お萩は首をかしげました。が、娘心には、そんな恐ろしい企^{たく}みのある顔が映^{うつ}りさうありません。

「お前にはわかるまいよ、——俺が出る幕にはまだ早い。八五郎をやつて、一應調べさして見よう」

「――」

お萩は不足さうでしたが、それでもさすがに、口には出しません。

「なア、八。お前が行つて持前の鼻をきかせるがいゝ」

「幫間醫者をうんと脅かしてみませうか」
おど

八五郎はスタートに並んだ競馬馬のやうに弾みきつてをります。
はず

「そいつはお前の手には了^をへまいよ。それより板倉屋の内輪のことを調べてみるが宜い。その妾のお常の身持、番頭忠助の評判、養子の幸吉と主人萬兵衛の仲など、氣になることがあつたら、とことんまで調べ抜くのだ。どうかすると、悪者は主人萬兵衛を殺す氣でやつたことかも知れない。棟^{とうりやう}梁^{りやう}にも毒酒を吞ませたの

は、なんかの誤魔化しかも知れないぢやないか、——幸ひ主人萬兵衛は、酒が弱いので助かつたといふこともあるだらう」

平次のコーチはさすがに行届きます。

お萩はこれ以上平次に頼むこともならず、お靜に慰められて、しをくくと歸つて行きます。涙が乾いて、興奮が納まると、青白く引ひきしま緊つた顔が、江戸娘らしいいきかん氣を匂はせて、多い髪も、赤い唇も、なかくの魅力です。

「それぢや、行つて來ますよ親分」

その後ろから、懷ろを十手で突つ張らせた八五郎、照れ臭さうでもあり、嬉しさうでもあります。

「親分、困つたことになりましたよ」

あの張り切つて深川へ出向いた八五郎が、ぼんやり戻つて來たのは、それから三日目の晝頃でした。

「何を困つてゐるんだ。財布さいふでも落したといふのか」

錢形平次は相變らずの不精煙草です。

「財布なんか落したつて驚きやしませんよ。憚はげりながら百も入つちやゐないんで」

「呆あきれた野郎だ、——それともあの娘に口説くどかれたとでもいふのか」

「それなら、願つたり叶つたりで——實はね親分、肝心の娘が行^ゆ方^{くへしれず}不明になつてしまつたんです」

「何時のことだ、それは？」

平次もさすがに驚きました。事件は決して單純ではあるまいと思ひましたが、あの娘が姿を隠したとあつては容易のことではありません。

「昨夜^{ゆうべ}ですよ。お萩の叔母のお紺といふ、出戻りの四十女が青くなつて飛んで來ましたよ」

「お前はどこにゐたんだ」

「八幡前の専次の家に泊つてゐると、亥刻半^{よつはん}（十一時）過ぎに、氣違ひのやうに戸を叩くぢやありませんか。——姪のお萩が久し

振りに町内の丁子湯ちやうじゆへ行つて、それつきり歸らず、氣を揉んで

丁子湯へ行つてみると、お萩はザツと流して、間もなく歸つたといふんださうです。それから二た刻も経つてゐるのに、お萩はどこへ行つたかわからず、死んだ兄の佐太郎の弟子で、佐太郎の家にゴロゴロしてゐる久治と二人、心當りを精一杯に搜したが、それつきり行方不知になつてしまつたといふんです」

「今朝になつても出て來ないのか」

「へエ、さうなんで」

「縁起のよくねえことだが、殺された様子もないのか」

「海も川も鼻の先だが、船を出して一通り搜しても死骸は見えませんか」

「お萩に男はなかつたのか」

「あのきりやうですもの、いひ寄つた男や、焦^じれてゐる男は何十人あるかわかりやしません」

「何を隠さう、八五郎もその一人だつてね」

「あつしはいひ寄られた方で」

「呆れた野郎だ。お前は長生きするよ」

「ところで、何んの話でした？」

八五郎は掛合ひ話に氣を取られて、話題を忘れてしまつた様子です。

「あの調子だ、——お萩に男がなかつたか、それを訊いてるぢやないか」

「あの娘に夢中なのは、随分澤山あるやうですよ。中でも首つたけの二人」

「誰と誰だ」

「板倉屋の養子幸吉と、佐太郎の弟子の久治。あの男はお萩と同じ屋根の下に住んでゐるわけだが」

「その二人は昨夜どこにゐたんだ」

あいにく

「生憎久治は叔母のお紺と家にゐたに違ひはないし、板倉屋の若旦那の幸吉は、番頭の忠助と月末の帳合に忙がしく、亥刻よつ（十時）近くまで夜業よなべをしてゐたさうです」

八五郎の話が本當なら、お萩の行方不知に關することだけは、佐太郎の弟子の久治も、板倉屋の養子の幸吉も疑はしい節は少し

もありません。

「ところで、お前の方の調べはどうなつたんだ。板倉屋と棟とうりや

梁うの佐太郎を怨んでゐる者の見當でもついたのか」

平次は話題を變へました。三日前に八五郎を深川へやつたのは、お萩を見張らせるためではなくて、板倉屋の毒殺事件を調べさせ、佐太郎を殺した下手人を挙げさせるのが目的だつたのです。

「困つたことに、それが少しもわかりませんよ。板倉屋の主人萬兵衛は年甲斐もなく女をんなぐせ癖せが悪く、三年前に内儀が死んでから

は、後添えも貰はずに亂行續きですが、金がうんとあつて太つ腹で、人に怨まれるやうな人間ぢやありません。尤もあの身しんしやう上うはまともな廻船問屋で三年や五年にできるわけではないから、内々

抜け荷でも扱つてゐるんじゃないか——とこれはやきもち半分の町内の評判ですがね」

「抜け荷か」

「それに女癖の悪いことは深川一番で、妾のお常なんかこの馬の骨ともわかりやしませんよ。いかもの喰ひの萬兵衛が、夜鷹よたかか何んかの一番丈夫で脂あぶら臭くさくて、ブヨブヨしたのを拾つて來たんだらうといふ噂ですが、近頃その小汚いの嫌氣がさしたやうで、出すとか出るとかブスブスくすぶ燻つてゐるさうです。尤もあのお常がまた大變な女で、少し毛並の良い雄をすを見ると、すぐ尻尾を振つて絡からみ付く癖があるんだつていひますが」

「大變な女だな」

「養子の幸吉は意氣地も働きもないのを取柄で貰はれて來たやうな男で、養父の萬兵衛との仲はあまり良くありません」

「番頭の何んとかいつたのは」

「忠助ですか。ノツソリしてゐる癖に、恐ろしく慾の深い男で、馬鹿見たいな惻口者ですね」

「それつきりか」

「醫者の石原全龍坊主は、思つたほどの大藪ぢやありませんが、そのうちに公儀から召出されて公方様の糸脈くぼうを引くんだなんて大法螺ほぼろを吹いてゐるところをみると、あんまり信用のできる醫者ぢやありませんね。その上板倉屋からは何百兩といふ借金があるやうで」

「ところで、殺された棟梁とうりやう佐太郎の内には弟子の久治と、お萩の叔母のなんとかいふのがゐる筈だな」

「佐太郎の妹で、出戻りの四十女。お紺といふ、ちよいと色つばい中婆さんですがね。こいつは、江戸一番の金棒曳かなぼうひきで、下女代りに兄の家の世話を焼いてをります」

「久治は？」

「これは好い男ですよ。氣前がよくて啖呵たんかが切れて、仕事じやうが上手で」

「大層褒めるぢやないか、まさか一杯おごられたわけぢやあるまいな」

「冗談で、——おごつたのはあつしの方ですよ、酔はして置いて

いろ／＼聴かうと思つたが、なか／＼口を割りません」

「よし／＼、そんなことで澤山だ。お萩はいづれどこからか出て来るだらう。少し氣ながに見張つてゐるがよい」

「親分は？」

「俺は外に御用がある。大急ぎでそれを片づけて、明日、——遅くも明後日は行つてみる」

「さうですか」

「お萩を捜すのは、張合ひのある仕事ぢやないか。不足らしい顔をするな」

平次にかはれながら、八五郎はまた深川へ取つて返しました。が、併し事件はこれからが本當の山だつたのです。

四

平次はその翌々日の朝、ようやく身體の明いたのを幸ひ、八五郎との約束を果す氣になりました。

深川の熊井町に着いたのはもう巳刻よつ（十時）過ぎ、大川沿ひに建つた廻船問屋の板倉屋を覗くと、

「あ、親分、大變なことになりましたよ。今明神下まで飛んで行かうと思つたところで」

八五郎は鐵砲玉のやうに板倉屋の店から飛び出しました。

「どうした、八。借金取りにでも會つたのか」

「そんなつまらねえ話ぢやありませんよ。こちらへ來てみて下さい」

八五郎は平次の手を引いてグングン川沿ひの庭の中へ入つて行くのです。

「どこへ行くんだ」

「これですよ、幸ひまだ検屍前だ。川から揚げて半刻も經つちやゐません」

裏木戸寄りの涼み臺の上に水死人を載せて、さすがに荒筵あらむしろは遠慮したらしく、浴衣を掛けてあるのを取ると、瘦やせた中老人の死骸が、秋の陽の下に淺さいらましく曝さらされるのでした。

「これは？」

「板倉屋の主人ですよ」

色好みで金儲けの上手だといはれた、板倉屋萬兵衛が、水死人になつて、自分の家の數寄を凝こらした庭の涼み臺に、檢屍の役人を待つてゐるのです。

「首筋から肩へかけて、大變な傷があるぢやないか、——それも生きてゐるうちに、鳶とびぐち口のやうなもので突かれた傷らしいな。

肉がはせて、ひどく血も出た様子だ」

平次は萬兵衛の死骸を丁寧に調べてをります。商人らしく地味つむぎな紬ひとへの單衣を着て、帯はきちんと締めてをります。さすがに衣紋は崩れて、みぞおちのあたり、ひどく脹れてゐるのが目立ちます。「でも、溺れて死んだには違ひありませんね。廻船問屋でもして

ゐるくらゐで、泳ぎは自慢だつたさうですが」

「これだけの傷を受けちや、少しぐらゐ水の心得があつたところ
で、自由に泳げまいよ」

「ところで不思議なことがあるんですがね」

「何んだ」

「死體の着てゐる單衣の袂たもとから、こんなものが出て來たんです」

八五郎は懷中紙の間から、小型の黄楊つげの梳すき櫛ぐしを一つ出して見
せました。そんなに古いものではありませんが、不思議なことに、
その櫛の中程、齒へ堅く挟んで、五六本の長い柔かい髪の毛が、
キリキリと巻き附けてあるのです。

「この櫛は誰のだ」

「誰のともわかりませんよ。まだ見つけたばかりで」

「いづれわかるだらう、——こいつは飛んだ證據になるかも知れないよ」

平次は死體から離れると、板倉屋の家の周囲をまはりと廻りしてみました。

さすがに見事な構へで、二階座敷が大川へ乗り出してゐるところは、十何日か前の晩に、棟とうりやう梁りやうの佐太郎と主人の萬兵衛が中毒騒ぎを起した座敷でせう。

塀の外の道は僅かに一間足らず、ろくな柵さくもないので、夜分などは川へ落ちないとは限りません。裏木戸の中には二た戸前の土藏むねが棟むねを並べ、わけても一つは四十坪もあるでせう、如何にも嚴

重で堂々として、板倉屋の富を物語つてゐさうです。

土藏と土藏の間に大きな物置があり、覗くとその中には、船の道具が雑然と並べてあります。

「八、これをどう思ふ」

平次はその奥の方からひのき檜の手頃なさを棹を抜き出しました。

「先の方が濡れてゐますね」

八五郎は尤もらしく顔を寄せます。物置の奥に入れてある棹が、心持濡れてゐるのは不思議ですが、八五郎にはそれ以上のことはわからない様子です。

「石いしづき突に血が附いてゐるぢやないか。よく見るがいゝ」

「あッ」

この邊りでは滅多に使はない、鐵の石突の着いた棹さそですが、その先の錆さびに交つて、明かに洗ひ残した血の痕がみえるのでした。

「人にいふな、櫛くしのこともこの棹の血も内證だぞ」

「へエ」

平次は外廻りはそれくらゐにして、家の中へ入ると、先づ妾のお常を呼び出して貰ひました。

「昨夜のことを詳しく訊くはきたいな、御新造」

平次は六疊の縁側にかけたまゝ、遠く主人萬兵衛の死體を見ながら、かう始めるのでした。如何にも氣の置けない態度です。

「亥刻よつ（十時）時分でした。主人は何時ものやうに、土藏から家の廻りを見廻つて來るからと、提灯をつけて出て行きました。――

—その提灯は今朝藏の戸前の外に消したまゝ、ありましたか」

「確かに燃えきつてはゐなかつたのだな」

「新しい蠟燭ろうそくを入れて行きましたが、一寸くらゐ減つてゐるやうです」

この女は恐ろしく無智らしい癖に、妙に行届いたところがあります。

「夜の見廻りは丁寧で、どうかすると半刻もかゝることがありますが、それにしてもあんまり遅いので、子刻こゝのつ（十二時）近くになつてから、幸吉さんが様子を見に出かけましたが、どこにも見えなかつたさうで、間もなく戻つて参りました」

「その前には誰も外へ出なかつたのか」

「これは主人を捜しに出たわけではありませんが、番頭の忠助さんが、——外で人聲がするやうだと、裏木戸を覗いた様子でしたが、——なんでもない——といつて四半刻ほど見廻つてから歸つて來ました。亥刻半よつはん（十一時）過ぎだつたでせう」

「それから」

「一と晩大騒ぎをしました、なんにもわからず、たうとう朝になつてしまひ、八五郎親分も來てくれましたが、晝近くなつて、あの通りの姿で永代えいたいの下に浮んださうで」

お常はそれでも涙を拭く眞似などをしてをります。

「お前とは仲が良かったことだらうな」

平次の問ひは唐突でした。

「いえ、——近頃は喧嘩が絶えませんでした。どうかしたら私は近いうちに追ひ出されたかも知れません」

この女は恐ろしく正直です。が、考へて見ると仲が良かったといつたところで、誰もそれを保證してくれる筈はなく、どうせ仲の悪さが知れるものなら、自分の口から正直にいふ方が、賢い^{かしこ}のかもわかりません。

「主人を怨んでゐるものはなかつたのか」

「飛んでもない。太つ腹な良い人でしたもの」

お常は強く否定します。

「この櫛^{くし}に覚えはないか」

平次は八五郎から受取つた、死體の袂にあつたといふ梳^すき櫛を

見せました。

「いえ、少しも」

お常は極めて自然に無造作に頭を振ります。

五

養子の幸吉は小柄で一應は小才がきゝさうですが、こんなのは案外正直で、世間並で平凡過ぎる人間かもわかりません。

養父の萬兵衛と仲の良くなかったことは、本人の幸吉も しやうに 承

認 ん してをりますが、あとはお常のいったこと以上はなんにも知

つてゐず、この男の賢さは附け焼刃で、個性も洞察も すゑさつりよく 推察力

もなんにも持つてゐないことを、やがて平次も知り盡してしまひました。

「お萩が行方^{ゆくへ}不知^{しれず}になつた晩、お前は確かに店にゐたことだらうな」

「番頭と帳合に忙しくて、夕方から一步も外へは出ません。忠助どんに訊いて下さい」

「その時主人はどこにゐたのだ」

「土藏の中でせう」

「何？」

「大きい方の土藏の中を修復して、書畫骨董^{こつとう}などを片付けるのださうで、一と月も前から棟梁^{とうりやう}の佐太郎一人だけを入れて働

かせてをりました。私も番頭もお常さんでさへも、土藏へは入れないことになつてをりました」

「それはどういふわけだ」

「金銀などを扱ふから、人には見せたくないといつてをりました。あの晩も多分そんな片付けをしてゐたのでせう——親父おやぢは夜分でもちよい／＼一人で土藏へ行つて仕事をしました」

「近頃はすっかり元氣になつてゐたのだな。毒を吞まされたといつたが——」

「佐太郎親方はすぐ死にましたが、親父は翌る日はもう元氣になつてをりました」

「ところで、もう一つ訊きたいが」

「――」

平次は少し改まりました。

「お前は、お萩をどう思つてゐた？」

「どうといつて」

幸吉はパツと赤くなりましたが、そのまゝウヤムヤに言葉を濁_{にご}してしまひました。

次に會つたのは番頭の忠助でした。よく肥つた三十五六の男で、愛嬌のある顔、要領の悪い口調、一應はブーツとしたやうに見えて、思ひの外如_{じよさい}才がないところがあります。

「幸吉と父親の仲が悪かつたさうぢやないか」

「――」

「それにはわけがあるだらう。お前は知つてゐる筈だが」

平次の言葉には、なか／＼掛引がありました。

「よく存じてをります。つまらないことですよ」

「つまらないことゝいふと」

「若旦那が、棟^{とうりやう}梁の娘のお萩さんを嫁に欲しかつたんで、――

――唯それだけのことで」

忠助の言葉は妙に皮肉でした。

「主人を怨む者は他になかつたのか」

「あるわけはありません。あの通りの太つ腹で、奉公人も出入り職人も随分潤^{うる}ほつてゐました。現にこの私など、多寡^{たくわ}が廻船問屋

の番頭で、年に五兩か六兩の手當が當り前ですが、十兩の給金の

外に、盆暮には十兩づつの御手當を貰つてをります」

「大層なことだな、——ところで、お前がこゝへ奉公して何年になる」

「たつた二年で——まだあの土藏の中へも一人では入れてくれません」

「板倉屋は抜け荷を抜つてゐるといふ評判を聴いたが——」

「飛んでもない親分、そんなことがあるものですか」

「ところで、お前はなにか知つてると思ふが、例へば棟梁の佐太郎が死んだ晩、酒の爛かんは誰がつけたんだ」

「主人は酒がやかましくて、決して人に爛を任せませんでした」
「呑み残した酒は調べたことだらうな」

「毒死でないと決つたので、残つた酒はみんなで頂いてしまひましたが、中毒を起したのは一人もありません。——もう十二三日も前のことです」

忠助のいふことにはなんの不思議もありません。

「ところで、お萩の行方不知になつた時、なにか變つたことに氣がつかなかつたか」

「なんにも氣が付きません」

「昨夜、ゆうべ主人が外へ出た後で、お前は裏木戸を覗いたさうだが――」

「それを申上げようかどうか、迷つてをりました」

忠助は額をひたひ揉み込むやうに、ひどくいひ澁つてをりました。

「とも角いつてみるがいゝ。主人が死んだといふ大事な時だ、つまらねえ遠慮をして、下手人を逃がしてはなるまい」

「では思ひきつて申上げませう。——昨夜亥刻よつ（十時）頃、裏の方で人聲がいたしましたので、私は心配になつて出て見ました。それが佐太郎親方のところにある久治の聲で、ひどく怒つてゐる様子なので、捨て置けない心持になつたのです」

「なに？」

「丁度私が裏木戸へ行つた時、なんか川へ落ちたやうな、大きな水音がしましたが、覗いて見ると、川岸縁かしぶちには誰もゐませんでした。闇を透すかして見ると、町の方へ人の逃げて行く足音を聞いたやうに思ひますが、確かなことはわかりません」

これは重大な證言でした。平次は黙つて八五郎を振り返ると、心得た八五郎は獵犬のやうに、彈^{はず}みきつてどこかへ飛んで行きま
す。

「お前は川を覗いては見なかつたのか」

「まさか主人が落ちたとは氣が付きません。石でも投つたことと思つて、そのまゝ家へ入つてしまひました。――へエ外にゐたのはほんの一寸で」

「もう一つだけ聽いて置きたい」

「――」

「棟^{とうりやう}梁^{りやう} 佐太郎が死んだ時、お前は本道の全龍先生を追つかけて、その口を塞^{ふさ}いだ筈だ。それを聽かうか」

平次の態度は容赦のないものでした。

「主人が苦しみながらも、全龍先生に百兩も握らせるやうに申しつけました。私は追っかけてその通りする外はなかつたのです」
忠助はかういひきるのです。主人萬兵衛が死んだ今となつては、最早遠慮する必要もないと思つたのでせう。

六

平次は八五郎の後を追つて棟梁の佐太郎の家へ行きましたが、肝心の久治は朝からどこかへ行つて歸らないさうで、八五郎はお萩の叔母のお紺と押問答の眞つ最中でした。

「留守なら、お前は暫らく見張つてゐるがよい。ところでお紺さん、この櫛くしに見覚えがあるだらうな」

平次は例の髪のを巻いた梳すき櫛を出して見せると、

「あ、どこにあつたんです。これはお萩が湯へ行くとき持つて行つた、あの娘この梳き櫛に違ひありません」

四十前後、出戻りの叔母のお紺は、名代の金棒かなぼうひき曳であるにしても、正直者で純情家らしい女でした。

「八、いよく大變な事になつたぞ」

「何が大變です、親分」

「もうひと息だ、——ね、お紺さん。これは大事のことだが、久治はお萩に夢中だつたんだね」

「それはもう親分さん、はたで見ても、痛々しいやうでした。あの生き一本の久治が、お萩のことといふと——」

「ところで、板倉屋の主人の萬兵衛は、お萩を奉公に出せとか何んとかいつたことなどがあるだらう」

「さうですよ、あの助平爺いがお萩を可愛がつて、——嫌らしいことはしないし、妾めかけ奉公といふわけではないから、小間使のつもりで奉公に出せつていふんです。兄は怒つてゐましたよ。でも不ふ斷だんお世話になるお店のことだし、ポンポン斷だんわるわけにも行かなくて、頭痛に病んでましたよ」

「それつきりか」

「板倉屋の旦那は夢中で、お常さんを出してもいゝとまでいふん

ですつて。でも兄もさすがに首を縦に振り兼ねて、愚圖々々してゐるうちにあんなことになつてしまひました」

お紺の話で、事件にまた新しい面が開けた様子です。

「八、こゝは頼むぞ」

平次はそんなことにして、町内の醫者、石原全龍の家へ飛び込んだのです。

「何？ 錢形の親分が來た」

庭先に飛び込んだ平次を、大坊主の全龍は、尤らしく縁先に迎へました。

「全龍先生、人間の命二つ三つに關^かはることだ。打あけてお話を願ひたいんだが——」

「何を打ちあけろといふのだえ、親分」

全龍は縁側に片膝を突いて、少し屹きつとなります。

公方くばう様の糸脈を引く——と大法螺おほぼらを吹くだけあつて、なか／＼の見識けんしきです。

「あつしは先生をどうしようといふ氣で來たんぢやありませんよ。ね、全龍先生。棟梁とうりやうの佐太郎を殺し、お萩を誘拐かどはかし、板倉屋の主人を殺した曲者は、先生の言葉一つで、見當がつくのですぜ」

「それを私が知つたことか。冗談ぢやない、——それだけの用事なら歸つて貰はうか、親分」

全龍は以ての外の口振りです。

「ぢや、訊きますが、——佐太郎が死んだ晩、主人のいひ付けで、番頭の忠助が百兩の金を先生に渡した筈だ。あれはどういふわけ——」

「——」

「こいつを申立てると、先生の立場はイヤなものになりやしませんか」

「いや、さうまでいはれては仕方がない。實は、棟梁佐太郎が死んだのは、あれは砒石中毒ひせきかも知れない——石見銀山鼠捕りでも吞まされたのだらうと一度は思つたが」

石原全龍もいや／＼ながら打ちあけるのです。

「主人も同じことで」

「いや、主人の萬兵衛は違ふ。主人の容體は砒石の中毒ではない。だから私は表沙汰にしなかつたのだ。砒石の中毒はあんな手輕なものではない」

「それは？」

「主人は唯吐^はいただけのことだ。容體は佐太郎に似てゐるが、これは確かに違ふ」

石原全龍は思ひも寄らぬことをいふのです。

「そんなに吐かせる藥はあるでせうか、先生」

「南蠻物^{なんばん}にはよく効く吐劑がある。南の方の國で取れる吐根^{とこん}な

どはその一つだが、なか／＼手には入るまいよ、——だが、こいつは内證^{ないしよ}にして貰ひたい。親分が折角いふからかうでもあらう

かといふところを話したまでだ。表向きは萬兵衛も佐太郎も、酔物の中毒でやられ、運が悪くて佐太郎が死んだといふことになつてゐる」

「――」

平次はこの間に合せのたいこ幫間醫者の面上に唾つばを吐きたいやうな氣持でしたが、とも角も打ち明けてくれたのをせめてものことにして、そのまゝ歸る氣になつたのでした。

とうりやう棟梁の家へ引き返すと、八五郎が大工の久治の胸倉を取つて大騒ぎをしてをりました。

「親分、これはどうしたことです」

久治は平次の顔を見るといきなり救ひを求めるのです。

「八、手を放すな、——おい久治、お前は昨夜何をした」
ゆうべ

「板倉屋の※々爺ひひぢぢいに會ひましたよ。でも、大川へ飛び込んだのはあの※々爺のせいで、あつしの知つたことぢやありませんぜ」

「なんだと」

「お萩ちゃんを隠したのは、板倉屋の親爺に違ひないと思つて、あの岸縁をブラブラしてゐるとあの萬兵衛の※々爺が、裏木戸から顔を出して、嫌味いやみなことをいひながら突つかゝつて來るから『お萩さんをどうした』つて詰め寄ると、いきなり力任せにあつしを突き飛ばすぢやありませんか——背後うしろは大川で後がねえ」

「お互ひの姿は見えたのか。月はなかつた筈だが」

「水明りで、結構相手の様子がわかりましたよ。川を後ろに背負しよ

つてゐるんだから——その時、あつしは危ないと思つて身をよけると、萬兵衛親爺奴、突いて出た弾はずみに、もんどり打つて大川へ飛び込みましたよ、——相手は泳ぎが達者だと知つてゐるから、少し涼ませるのも洒落しやれてゐるだらうと、そのまゝ後ろも見ずに歸つてしまひました」

久治の話にはなんの巧たくらみがあらうとも思はれません。

「ところで、お前はあの邊へ時々行つたことがあるのか」

「飛んでもない、板倉屋の裏口ですよ、お萩ちゃんのことでも心配しなきや、あんなところへ行くものですか」

「木戸の内に物置があつた筈だが——」

「あつたかも知れませんか」

久治から訊くことはそれで全部でした。が、平次は何を思ひ出したか小戻りして、

「棟梁とうりやうの佐太郎が生きてゐるうち、板倉屋の仕事をしてゐた

さうだが、何をやつたんだ」

妙なことを訊くのでした。

「大きい方の土藏の中に、なにかむづかしい普請ふしんをしてゐたさうです。親方一人で引受けて、あつしなんか覗いて見たこともありません。板倉屋の人達も、近頃はあの藏の中へ入れなかつたさうです」

「それで解つたよ。八、來い」

「どこです、親分」

平次は八五郎をつれて、板倉屋へ取つて返したのです。

七

「八、あの野郎だ」

平次の指さしたのは、裏木戸のあたりをウロウロしてゐる番頭の忠助でした。

「あ、何をしやがるんだ」

八五郎はもんどりを打たせられました。忠助は思ひも寄らぬ腕達者だつたのです。

が、續いて飛びついた錢形平次は、さすがに汗あせも掻かずにこれ

を取つて押へました。

「この野郎」

その頭を押へて小突き廻したのは、投げられた口惜くやしさの八五郎です。

「畜生、俺は縛られるが、その代りお萩は死ぬぞ」

平次の膝の下に忠助は齒を剥むくのです。

それは實に恐ろしい脅けふはく迫でした。

「お萩のゐるところは、この俺が知つてゐるだけだ。俺が口を割らなきや、お萩の命は今日一日保つめえ。ざまア見やがれ」

「野郎」

八五郎はカンカンに腹を立てますが、大事な鍵を握られてゐる

らしいので、どうにもなりません。

「八、驚くな。俺には見當がついてゐる」

平次は案外落着いてをりました。

「どこです、親分」

「あの大きい土藏の中だ。鍵はこゝにある。この番頭野郎が持つてゐたんだ、——お前が行つてもむづかしい、——久治を呼んで来い。餅は餅屋だ。あの男なら、死んだ棟^{とうりやう}梁^{こき}の拵へた隠し戸棚かなんかを開けるに違げえねえ」

「よしッ、見てゐろ」

八五郎は棟梁の家へ飛びます。

久治をつれて来て、土藏の中へはいりましたが、その中に拵へ

た隠し戸棚を見つけたことは容易でなく、それを開けるのにまた久治と平次は智慧を傾けました。かたむ

ざつと一刻ばかり。ようやく開けたのは、土藏の一方の壁に造つた秘密の戸棚で、その中から出てきたのは、おびたゞ夥しい抜け荷、密輸入された物資——だつたのです。

珠玉、細工物、ギヤーマン、羅紗、らしやそれに南蠻物の生薬きぐすりの數々。その中には萬兵衛が呑んだと思はれる吐根も、とこん佐太郎を殺したと思はれる砒石ひせきも交つてゐたことはいふまでもありません。

この隠退藏物資の山の奥に、半死半生の姿で、美しいお萩は隠されてをりました。うゑ餓と苛責かしやくとに疲れ果てて、最早助けを呼ぶ力もなく、僅かに顔を擧げて夢心地に、灯をかざしてゐる救ひの

手の、誰彼の顔を眺めるのでした。

「お萩さん、助かった。錢形の親分のお蔭だ」

久治は飛び込んで處女むすめの弱り果てた身體を抱き上げたのです。
二人は人の見る眼も忘れて濡れた頬を寄せます。

×

×

×

事件が落着してから平次は、相變らず繪解きをせがむ八五郎に、
かう話して聽かせました。

「板倉屋の萬兵衛は、あの抜け荷の隠し場所に困つて、棟梁とうりやう

の佐太郎に隠し戸棚を拵へさせたが、うつかり口走られると、命
がけの大事になるから、お月見に祝ひ酒を吞ませることにして、
佐太郎を毒害したのだよ。毒は砒石ひせきだ、二本目の徳利に入つてゐ

たのだ。最初の徳利はなんにも入つてゐないが、酒を呑む前に、萬兵衛はうんと吐根とこんを呑んでゐた、——二本目の酒——毒の入つたのは佐太郎一人で呑んだかな。同じやうに吐はいても、主人萬兵衛に別條なかつた。うんと苦しさうな顔をしただけのことだ。かうして置けば誰も萬兵衛に疑ひはかけない」

「へエ、恐ろしい企たくらみですね」

「萬兵衛は佐太郎を殺して、あの若くて可愛らしいお萩を手に入れたかつたのだ。その上、妾のお常が佐太郎に氣のあるのが癪しやくに障つたんだらう」

「お萩を誘拐いうかいしたのは」

「矢張り主人の萬兵衛だ。お萩の湯の歸りを誘つて、半分は力づ

くで土藏につれ込み、隠戸棚に入れて、氣長に口説いたのだらう。
お萩は賢い娘だが、どうしても外の人に自分のことを知らせる工
夫はない。散々考へた揚句、湯へ行くので持つてゐた黄楊つげの梳すき
櫛ぐしに、自分の毛を五六本抜いて巻きつけ、萬兵衛の袂たもとにそつと入
れた。なにかの弾はみに誰か氣がついてくれるものがあるかも知れ
ないと、萬一のことを頼みにしたのだらう——幸か不幸かその晩
萬兵衛は殺されて、櫛はお前の手に入つた」

「その萬兵衛を殺したのは、久治ぢやなかつたのですね」

「久治は良い男だ。最初から人などを殺す氣はないが、——自分
を川へ突き落さうとして萬兵衛があべこべに川へ落ちたのを見て、
少し良い心持になつて歸つたことだらう、——番頭の忠助は木戸

のところ、それを見てゐた。主人が岸へ這ひ上がらうとした時、
豫^{かね}て心得てゐる物置の中から、石^{いしづき}突の附いた物凄^さい棹^さを取り出
し、思ひきり上から突き落したに違ひない」

「へエ」

「それは忠助のいつたことでわかつたよ」

「あの男は人聲がしたので裏木戸から覗いたといつたらう。その
時、水音がして誰か町の方へ逃げて行つたといつた——その時は
もう久治はゐなかつた筈だ——棹^{さを}を置く場所を久治は知つてゐる
筈はないから、月のない夜に、それを取り出せるわけではない。もう
一つ忠助は外へ出て四半刻近くも歸らなかつたと、お常も幸吉も
いつてゐるのに、本人の忠助はすぐ戻つたといつた。——それか

ら忠助が無理に主人を褒めるのも變だし、これは後でわかつたが、金も随分取り込んでゐるし、お萩も隠し戸棚へ主人が死んだ後では忠助が來たと言つてゐる」

「悪い奴ですね」

「あんな悪い奴はないよ。土藏の隠し戸棚のことは主人と仲の悪い養子の幸吉は知らないから、お萩を手に入れた上、あの抜け荷をそつと取り込むつもりだつたらう」

「成程ね」

「久治は良い男さ。いづれお萩と一緒になつて棟梁とうりやうの後を立てるんだらう」

平次は満足さうでした。正直者が幸せになるのが、平次は何よ

り嬉しかったです。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第二十九卷 浮世繪の女」同光社

1954（昭和29）年7月15日発行

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

棟梁の娘

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>